

弦楽四重奏曲第5番「いのしし人間の諸相」の思想的背景

演奏者の大熱演のお陰で多くの賛辞を頂いているこの作品(彼らの承諾は受けており3月頃には公開できる予定)。私は大のクラシック音楽好きでその中心には弦楽四重奏(SQ)が居座っている。プラトン語る永遠界から降ってきたようなその演奏形態を一緒に考えたい。

現実の現代音楽はあの隆盛を極めたクラシック音楽の末裔としてはいかにもじり貧だが、SQの歴史を見るとベートーヴェンの偉大な作品群のあとは大作曲家達も作曲することが少なくなり、残る力作群もとうてい彼に太刀打ちできるものではない。

目立つところではシューベルト、シェーンベルク、ウェーベルン、バルトーク、ショスタコーヴィッチがある。だが、シューベルト独特の癒し性にSQの規範性は向いていない。シェーンベルクの音楽語法の難解さはそれを食する聴き手を無視している。ウェーベルンは学究的に緻密だが土台かつ所詮、特殊志向、特殊達成である。バルトークのは自己アピールの為の作曲パフォーマンスであり、親しみやすいが甘え根性は否定しがたい。ショスタコーヴィッチは音楽そのものに勢いがあるが、土台、即興作曲的でコクがない。いずれにしても弦楽四重奏に相応しい普遍性が意識されていない。

SQはスカラッチィ(1660年生)が発端でこれまでの歴史は短いものだが、そのずば抜けた普遍性と潜在的(作曲)可能性を思えばこれからの方がはるかに長くあってしかるべきものだ。その“器”としての非個性性と汎用性と来たらまるで絵画の額縁、その方形に匹敵する。また、高低差ある四つのポジションに置かれた弦楽器であることにより、人間の聴を大きく広げるとともにその裡の深くに染み入る能力を有する。聴⇒心⇒魂であり、当然それに関わる作曲活動は魂⇒心⇒聴である。

この中で、永遠性を有するのはただ魂である。当然、それは我々における生死を超越するものである。心や聴はこの世における生あるものに与えられた能力であり現象である。だが魂は違う。魂があつてこそ心も聴も成り立つ。だいたい魂がなければ自己もなく、世界もない。言い換えれば、永遠がなければ時空もない。

我々には意識というものが与えられているが、それは永遠からくる光なのだ。それを瞬間と呼んでいる。そしてその瞬間があるからこそ、時間の推移や空間の広がりも与えられる、というものだ。

わが師、三善晃は面白いことを私に語った。「ベートーヴェンの作曲は直線を引き、またそれに重ねて直線を引き、ということは何度も繰り返すやり方だ」と。もちろんその直線とは時間ベクトルである。猪となって作曲した者としては、これを猪突猛進法と名付けたいほどによくわかる。

時間線の上を滑りゆくものじゃない。瞬間に降り注ぐ光に抗するかのように真っ直ぐ突き進んでゆく猪の如きベートーヴェン。それに比べたら、それに続く作曲家の作品はすでにけもの道と化した時間線の上を滑りゆくような印象がある。さすがに第二ウィーン楽派あたりから、別の道を歩もうと道づくりを始めたものの、太陽の光の注がない文化的暗がりの中という観が私にはするがどうだろう。もちろん現象として明るく健康的で生命力にも事欠かないものもあるが、何か厚みがなく皮相的なのだ。逆に暗いものは深刻ぶっている感じが否めない(坂本龍一氏は優れた現代人ではあるが、シリアスな楽曲がないのは時代の責任というべきかも)。

だから私はイノシシであるほかないと思った。少なくとも第5番という猪突猛進劇「運命交響曲」と同じ番号を標榜する今回は！

もちろんベートーヴェンには叶わない。彼は大変イノシシ的ではあるが、あくまで人類の作曲家としての高さを実現している。その陰影の豊かさ、彫の深さ、自由自在さ。よくも猛進しながら多様に踊りまくれるものだ。

だが、受け入れがたいところもある。

歓喜の合唱のなかの次の歌詞

「大きな幸いを得たひと、(すなわち) ひとりの友の友となり優しい妻を得たひとはその喜びを共にしよう！ そうだ、たとえたったひとつの魂であっても自分のものと呼べるものが世界の中にあるのならば！ そしてそれができないものは、そっと出ていくがいい 涙しながらこの集まりの外へ！ (インターネットにある The Web KANZAKI music & knowledge sharing ベートーベン第九の歌詞と音楽 から引用させて頂いた)

これはちょっと冷たすぎると思う。最近ジェンダーレスということが標榜されているが、SQ第5のコンセプトでは知的障害者とIQ最高者との差別など無意味であるどころか、そんな小さな違いを飛び越えて、(全生物間とはいわなくとも) 全哺乳類間の差別【≠区別】を無くそうという分け。

だから私はベートーヴェンにクレーム付けたい。

「一人身だって差別しちゃダメ。あなた様の時代にもいただろうし、後世の21世紀にはますます増えつつあるのです。せめても一緒になって仲間に入れるよう努力し続けるべきではないですか？」と。

補) なおこのフォーラム・コンサート(旧アンデパンダン展)に私は2009年以来連続出品しており、弦楽四重奏は1番、2番、3番と発表(4番は作曲のみ)して来ているのでその感謝の念も深く、今回、思いのたけを語らせて頂いた次第です。さらに深くは私のホーム

ページに書き足してゆく所存です。

2023 年末 日本現代音楽協会正会員 ロクリアン正岡